# エウリピデスと οὔ που 疑問文

安西眞

## 1

エウリピデス(以下E.)が使ったοὔ πουで始まる直接疑問文の問題に関しては、Page(以下、研究者名による引用については、文献表参照のこと)122, Diggle *Studies* 58, Zuntz 196n., Kannicht 2. 54-5で言及されている。このうち最も詳細な言及はKannnichtによるものである。その要点を繰り返す。1 οὔ πουで始まる直接疑問文は、古典期のギリシア語作家の中で、E.の作品にだけ使用した痕跡が残されている。2 このやや異様に見えるかもしれない使用分布にもかかわらず、E.が使用したという事実に関しては、諸般の事情から疑いをさしはさむ余地はない(οὔ τί που疑問文という、類似する用法については、第3章参照)。3 οὔ που疑問文は、いわゆる「選集[1]」による伝承の部分では伝えられていない。この系統で伝承された悲劇では、ἦ πουという組みあわせを使ってοὔ πουを置き換えたと考えられる。οὔ πουは古典期以降も使われなかったので、あやまったギリシア語の使用であると、「選集」を伝承した書写者たちが判断した為である。その際、ἦ πουが置き換えの道具として使われたのは、韻律上の価値が同一であったこと、意味が比較的よく似ていたことによると見られる。4 伝承の過程での介入の痕跡も残されている。すなわち、古代期では、D. Chr.がE. *El.* 235(「選集」外の作品であり、Lは、οὔ πουを伝えている[2])をἦ πουを使って間違えて引用しており、*Med.*(「選集」に属する)1308を伝えるP. Harris 38は、本文の部分ではοὔ πουを書写しているが、本文上部にἦ πουを書き加えている[3]。また、中世伝承については、写本Lの複数の箇所でのTriclinisによる修正の試みがその痕跡に該当する。

我々が現在校訂本をつうじて読んでいるE.本文は、οὔ πουないしはἦ πουを使った直接疑問文に関してかなりゆれている。上のような事情で生じた不安定な写本伝承への対処法をめぐって、ルネサンス以来の校訂者たちの判断が必ずしも統一した観点のもとになされてこなかったことがある。また、現在でも、我々の目の前にある諸校訂本の編集者たちの判断は必ずしも細かいところまで一致していない。この2つが「ゆれ」の原因である。現在の最有力校訂本であるDiggle *OCT*にも、本稿

(1) この用語についての最も身近な記述は、Barrett 50-53であろう。さらに、Wilamowitz 1. 206-220をも参照。

(2) L (Laurentianus 32.2)とP (Palatinus gr.287+Laurentianus conv.soppr.172)の関係については、Turyn 264-306とその説を覆したZuntz 16-180を参照。現在の定説では(つまりZuntz)、Pは「選集」以外のE.作品に関して、Lのある段階(Tr.によるL改変の最初の介入の後、2回目の介入の前)の写しだということになっている(その他、例えば、Diggle *Euripidea* 298-304)。まだ、この問題について(ある説では、PとLは、同じ本から生じた兄弟)は、決着がついたとは言えない。本稿では定説の方によって記述している。つまり、Pにどう書写されているかは無視している。

(3) 注14参照。

筆者の納得できる一定した判断が展開されているとは見えない。

本稿の目的は、両者のどちらを読むべきかを判断する際の、できるだけ客観的な、信頼できる手続きで導き出された基準を立てることにある。ただ、紙幅の関係上、すべての「ゆれ」に対して解答を出すには至らない。あくまでも基準を導くことを主眼にし、解答については、E. *Tr.* の２箇所を中心とし、それに関連するものについて、ついでに少し論じるという形にしたい。本稿筆者がたまたま同作品の校訂・注釈本を作成するという作業のごく初期的な段階にあることも、この形になったことについては、影響がある。

E. *Tr.* の該当する問題を含む２箇所を巡る Diggle の判断 (A では οὔ που、B では ἦ που) に本稿筆者は疑問を持っている。結論を先取りして、読むべき本文をまず提起する ( カッコ内の A, B 等は引用文への通し番号の代用であり、また ap.cr. は当該の問題に関するものだけに限ってある )：

(A) *Tr.* 59-62

Πο. ἦ πού νιν, ἔχθραν τὴν πρὶν ἐκβαλοῦσα, νῦν
ἐς οἶκτον ἦλθες πυρὶ κατηθαλωμένης;

Αθ. ἐκεῖσε πρῶτ' ἄνελθε· κοινώσῃ λόγους
καὶ συνθελήσεις ἂν ἐγὼ πρᾶξαι θέλω;

**59** οὔ Wecklein (et Diggle)

— ひょっとしたらきみは、あれ ( トロイア ) に、灰になってしまったというので、かつての敵意を捨てて、同情をおぼえるようになったのだろうか？

— 最初にあのことにもどりなさい。わたしと相談をする気があるのか？そして、わたしがやろうとしてることに協力するつもりがあるのか？

(B) *Tr.* 161-3 (Anapaest)[4]

Χο. οἳ 'γώ, τί θέλουσ'; οὔ πού μ' ἤδη
ναυσθλώσουσιν πατρίας ἐκ γᾶς;

Εκ. οὐκ οἶδ', εἰκάζω δ' ἄταν.

**161** οὔ Wecklein: ἦ VPQ

— なんてこと。なにをあのひとたちしようとしてるんでしょう。まさか。この父祖の地から、もう、わたしを連れて行こうとしているのでは？

— 知りはしない。だが、災難が来てることは間違いなさそうだ。

上の２文が解答である。以下、その解答を導く為に、基礎とすべき例を全てあげる。L 写本に οὔ που という文字の痕跡が確実に残るものだけを一次的な資料とするべきであろう。分類については Kannicht に従っている[5]。

(4) まず、Wecklein は本文では写本の一致して伝える ἦ που を読んでいる、ということを報告しておく。その他にも、ap.cr. には問題はある。というのは、Wecklein は確かに ap.cr. に οὔ που を読むべきかもしれない、という見解を披露しているが、しかし、それは、本文の大幅な改定とともに「もし、οὔ που を読むのなら、こういう形で」というような含みで表記している。本稿筆者は ἦ που > οὔ που の書き換えだけで良い、と判断しているので、Wecklein の名のかわりに Anzai と表記すべきかもしれない。

(5) 本文と ap.cr. は、基本的に Diggle *OCT* に従っている。それで、例えば E-M に対する Kannicht の判断 ( 分類はこれに従って行った ) と、表示した ap.cr. の記述が食い

οὔ που の文字がそのまま L 写本に残されているもの：

(C) *El.* 235-6

Ηλ. οὔ που σπανίζων τοῦ καθ' ἡμέραν βίου;

Ορ. ἔχει μέν, ἀσθενὴς δὲ δὴ φεύγων ἀνήρ.

**235** ἦ που σπανίζει Dio

(D) *El.* 630-1

Ορ. οὔ πού τις ὅστις γνωριεῖ μ' ἰδών, γέρον;

Πρ. δμῶες μέν εἰσιν, οἵ σέ γ' οὐκ εἶδόν ποτε.

L 写本において、οὔ που が本文に残されており、本文上部の空間 (supra lineam) その他に、Triclinius が ἦ που という修正読みを書き加えているもの：

(E) *IT* 930-1[6]

Ιφ. οὔ που νοσοῦντας θεῖος ὕβρισεν δόμους;

Ορ. οὔκ, ἀλλ' Ἐρινύων δεῖμά μ' ἐκβάλλει χθονός.

**930** οὔ που L: οὔ πω Tr: ἦ που in margine

(F) *Hel.* 135-6

Ελ. οὔ πού νιν Ἑλένης αἰσχρὸν ὤλεσεν κλέος;

Τε. φασίν, βρόχῳ γ' ἅψασαν εὐγενῆ δέρην

**135** οὔ που L: οὔ πω Tr²: ἦ που Tr²ˢ

(G) *Hel.* 575-6[7]

Με. οὔ που φρονῶ μὲν εὖ, τὸ δ' ὄμμα μου νοσεῖ;

Ελ. οὐ γάρ με λεύσσων σὴν δάμαρθ' ὁρᾶν δοκεῖς;

**575** οὔ που L: ἦ που Tr

(H) *Hel.* 600-2[8]

Με. τί δ' ἔστιν; οὔ που βαρβάρων συλᾶσθ' ὕπο;

Θε. θαυμάστ', ἔλασσον τοὔνομ' ἢ τὸ πρᾶγμ' ἔχον.

Με. λέγ' ὡς φέρεις τι τῇδε τῇ σπουδῇ νέον.

**600** οὔ που L: ἦ που Tr

(I) *Hel.* 791-2[9]

Ελ. οὔ που προσῄτεις βίοτον; ὦ τάλαιν' ἐγώ.

---

違うことがあり得る。Tr. による写本 L への数次にわたる介入が、インクの色その他で識別出来るというのが Diggle の考えで、その判断が Tr の記号の下位分類に表れている。黒白フィルムで見た者としては従うしかないので、Diggle の表記をそのまま使っている。黒白フィルムで補えることは、以下の注でいくつか報告してある。

(6) Diggle *OCT* には全く報告されてないが、L には ap.cr. に示したように記されている。Tr の下位分類は、黒白フィルムでは決定出来ないが、他の例から判断するに、Tr² であろう。報告されていない、とは言ったが、そのことで Diggle *OCT* を批判している訳ではない。校訂本文につける ap.cr. は、写本伝承を明かにする為にだけ付けられるものではないからだ。

(7) 注 6 に同じ。

(8) 注 6 に同じ。

(9) 注 6 に同じ。

Με. τοὔργον μὲν ἦν τοῦτ', ὄνομα δ' οὐκ εἶχεν τόδε.

**791** οὔ που L: ἦ που Tr

L 写本において、本文に Triclinius が介入して、変更を加えているもの：

(J) *IA* 670-1[10]

Ιφ. οὔ πού μ' ἐς ἄλλα δώματ' οἰκίζεις, πάτερ;

Αγ. ἐᾶτέ'· οὐ χρὴ τοιάδ' εἰδέναι κόρας.

**670** οὔ ·πού L

(K) *Suppl.* 153-4[11]

Θη. οὔ πού σφ' ἀδελφὸς χρημάτων νοσφίζεται;

Αδ. ταύτῃ δικάζων ἦλθον· εἶτ' ἀπωλόμην.

**153** οὔ που Kirchhoff: οὔπω L: ἦ που Tr²

(L) *HF* 1101-4

Ηλ. οὔ που κατῆλθον αὖθις εἰς Ἅιδου πάλιν,
Εὐρυσθέως δίαυλον ἐξ Ἅιδου μολών;
ἀλλ' οὔτε Σισύφειον εἰσορῶ πέτρον
Πλούτωνά τ' οὐδὲ σκῆπτρα Δήμητρος κόρης.

**1101** οὔ που Dindorf: οὔπω L

(M) *HF* 1172-5[12]

Θη. ἔα· τί νεκρῶν τῶνδε πληθύει πέδον;
οὔ που λέλειμμαι καὶ νεωτέρων κακῶν
ὕστερος ἀφῖγμαι; τίς τάδ' ἔκτεινεν τέκνα;
τίνος γεγῶσαν τήνδ' ὁρῶ ξυνάορον;

**1173** οὔ που Dindorf: οὔ που τι L ut vid. (legendum?): οὔ πω τι L^pc

以上の痕跡は L 写本に見られる。既に言ったことであるが、「選集」によって伝承された悲劇には、οὔ που という文字の痕跡は中世写本中にはない。しかし、これらに属するにもかかわらず、*Med.* 1308 にも上記の例に準じた伝承上の証拠能力があるとみなすべきだろう[13]：

(10) 写本報告は Kannicht に従う。確かにはっきりとした点が 2 語に分つように打たれている。

(11) ap.cr. に記した Diggle の報告と、Collard の報告 (ἥ που Tr²) とが食い違う。恐らく Collard の間違い。η という字は ου (L) をつぶして太い字で書き直されている。さらに、L の οὔ についた気息記号と鋭アクセント記号をそのまま使って、Tr. は気息記号と、(鋭アクセント記号のさらに右側に重アクセント記号のようなものを書き加えて作った屋根型の) 曲アクセントを作り出して、並列させている (᾽ ῾)。一見、οὔ > ἥ > ἦ と変化していったようにも見えなくはないが、ἥ が文字として機能したことはない、と思われる。

(12) 注 19 参照。

(13) Kannicht 2. 54-55 も同じ見解である。Diggle は、Wecklein と同様に、中世写本の読みの方を採用している。この両者のどちらを選択するかという問題に限れば、全般的に Diggle は Wecklein にほぼ従った判断をしていると言えるようだ。合唱隊はイアソンの切実な問いに対していくらかズレた回答をしているように見える。彼女

(N) *Med.* 1308-9

Ια. τί δ' ἔστιν; οὔ που κἄμ' ἀποκτεῖναι θέλει;

Χο. παῖδες τεθνᾶσι χειρὶ μητρῴᾳ σέθεν.

1308 ου που Π (P. Harris 38): ἦ που Π$^{s}$: ἤ πω vel ἦ που codd.

Denniston, 492 には、οὔ που という形式が、E. に固有な用法であるという事実が記されている。また、οὔ που と οὔ τί που は意味が同じで(そのとおりであると本稿筆者も判断する—後述第 3 章参照)、incredulous or reluctant questions を導入する機能を有する、という記述も見られる。そして、Denniston が世に出た後は、ただその記述を引用するという形でのみ、この両者のうちのどちらを読むかという問題がある箇所は、処理され検討されて来たと言ってよいであろう(14)。この問題について、Denniston 以上の権威は存在しなかったのだ。しかし、結論から先に言ってしまえば、この種の判断を迫られる箇所について、Denniston の記述は漠然とし過ぎているということになるのだろう。だから、以下では、「文体」的にもう少し接近を試み、そして、この種の判断に関して汎用可能な記述を試みる。

## 2

上の例から得られる E. の οὔ που 疑問文にほぼ共通の規定は次のようなものではないか。

a [疑問の内容] この疑問文を発している者は、自分自身 (D, F, G, J, L, M, N) や自分に極めて近しい人の安全や、名誉、利益等にとって極めて好ましくないこと、だからこそまた認めたくないことが起きているのではないか、あるいは起きようとしているのではないか、という疑いを持っている。K は、やや性質が異なっているように見える。上の例と関連させる形でその疑問の内容を記述すれば次のようになるだろう。話者は、自分の人間観や社会観、あるいは社会の通念に照らせば、とうてい認め難いことが起きたのではないかと疑っている、と。これらをまとめて、別の言い方をすればこう記述することもできるだろう。この疑問文を発する者は、自分自身を冷静な第 3 者の立場に置くことが出来ないような事柄について、重大なことが起きたか、起きつつあるか、起ころうとしている、と疑って、この形式の疑問文を発している。

b [回答を迫る圧力] 発せられた疑問文は、対話の相手に回答を強要するだけの圧力を持っている。これは a に記した οὔ που 疑問文を構成する疑念の性格と一致している。ひとは単に興味を抱いた、自分を第 3 者の位置に置くことができるような種類の疑念を巡って、対話相手に回答圧力を感じさせるような疑問文を発することなど出来はしない。いちおう、例を確認しておく。例外らしく見えるものに説明を加えておけば十分であろう。L と M は対話相手を欠いているので、普通の意味での対話相手からの回答を持たない。しかし、ヘラクレスもテセウスも、自分自身がそ

たちは、τί δ' ἔστιν; という問いには答えているが、「自分も殺すのでは?」というイアソンの本当の問いには答えていないからだ。「回答を迫る圧力」という点に関して、οὔ που を読むにはいくらか問題を残す。この問題に関しては第 3 章で再び論じる。

(14) たとえば、Diggle *Studies* 58 を見よ。

の対話相手となって、回答を迫る圧力を受け取る。そしてその疑問に答えるべき手がかりを舞台の上に探し、その手がかりを見つけた上で答えを自分で出している。Mについては、さらに補足が必要だろう。テセウスが自分が感じた疑問に関して舞台から直接得ることのできた手がかり(つまり引用された範囲内で得たもの、ということになる)は、確実な回答を構成しうるまでに至っておらず、まだ疑問文の形をしている(1174b-5)。かれはまだ「この情景の意味は何か?まさか、自分の不名誉につながることではないだろうな」という疑念を捨てることができず、続く、アムピトリュオンとの場での一問一答(〜1202)の連続をつうじて回答を得るという形になっている。すべて引用すると長くなり過ぎるので引用を短縮したにすぎない。それほど疑念は発言者そのひとにとって深刻で切迫したものなのだ。Jについても説明が必要だろう。表面上、ここでは回答が拒否されており、その意味では、Aと似ているからだ。Aとの比較を一部先取りして解説すると、アガメムノンの回答は、本来答えるべきかも知れない正しい情報が、自分では答えることが出来ない、あるいは答えたくない内容なので、こういう形をしているのだ。そして、その回答拒否そのものによって、イピゲネイアの疑念(自分が属すべき家が変るのでは、という疑念)が真相をついているものであることを我々に告白している。そのような回答拒否である。この種の回答拒否は我々もよく知っているはずである。イピゲネイアの発した疑問文は結局、否応ない回答を相手から引き出すだけの圧力を持っていたのだ。

c [叫び声、その他] もうひとつ、οὔ που疑問文が引き起こす、文字に表れざるを得ない特徴がある。それは、問いの深刻さに応じて、その発話者に生じる緊張である。驚きと呼んでいいかもしれない。そして、その緊張が発生させるところの、短い驚きの言葉、呼格、等である:γέρον (D), τί δ' ἔστιν; (H, N), ὦ τάλαιν' ἐγώ (I), πάτερ (J), ἔα (M)。

以上、要するに、οὔ που疑問文は、深刻な、場合によっては発話者の存在そのものを揺るがしかねないような疑念を核に成立している、と結論付けてよいだろう。本稿が目的としている本文批判上の問題について直接論じる前に、以上のようなοὔ που理解を前提に、ἦ πουの問題にも触れておきたい。Denniston 286は、ἦ πουの機能をaffirmativeとinterrogativeに分けており、それぞれ、ほぼ拮抗する数の例文をあげている。割いているスペースも同程度である。このことが既にἦ πουの、οὔ πουと比較した場合の、ある決定的な特徴を言い表わしている。ἦ πουに導かれる文に疑問符を付するか否かは、その疑問文が突き付けられた相手の反応如何にかかっているのだ。あるいは、その反応をどう判断するかという本文編者の判断如何にかかっているのだ。否応ない回答を迫る圧力はけして大きくはない、と判断してよいであろう。また、Denniston が、affirmativeな例に2回繰り返して付けている'ironical'というコメントから、さらに、interrogativeなものと分類している例に付けるべき代表的な訳としてかれが提示している'I expect....?'などから、次のようなかれの判断を引き出しても不当ではないだろう、と思う。つまり、もし仮に疑問符を付すべきだ、とかれが判断している例でも、その疑問文には発言者の深刻な疑念は含まれてはいない、とかれは考えている。あるいは先に記述したοὔ που理解に関連させていうなら、そこに含まれている疑念は、疑問文の発言者が自分自身

を疑念に対する第3者としての場所に置くことができる種類のものだということになる。ἦ που 疑問文に関する以上のような Denniston の解説に対しては、本稿筆者は基本的には、疑問を持っていない(15)。

以上に提示した οὔ που が持ちうる意味の広さは、E. における οὔ που が実際に持っていた意味の領域よりも狭い恐れがある(広いという恐れはない)。なぜなら中世写本その他にいかなる痕跡もない、純粋に近代の編集者の判断によって認められている οὔ που 疑問文の例が実際にまだあり、それらは本稿の検討の対象にならなかったからだ。そしてそこに、本稿の想定した意味範囲を越えるものがあるかもしれないからである。しかし、本稿の対象とした具体的な例(例文 A, B)に限れば、以上に定めた範囲で判断を下すことが出来るように思える。

ポセイドンの発言は、先ほどの a-c のどの基準も満たさない。Wecklein-Diggle に従って οὔ που を読むのは、悪しき判断であろう。写本の読みを維持すべきである。疑念を巡ってポセイドンの緊張が高まっているとは言えない。少なくともこれまで見た例に見られた interjection の類を、かの神はここでは発してはいない。また、アテナが、死すべき人間どもの一部にしか過ぎないトロイア人に対して、かつて持っていた敵意を捨てて同情を持つようになったところで、ポセイドンの生存や名誉に重大な脅威を与えるはずもない。アテナは、この問い(疑問文の形で印刷する従来の判断は言うまでもなく正しい)に対してまともに答えることを拒否する。しかし、この拒否は、アガメムノンがイピゲネイアの問いに答えることを拒否した J と、同じ意味を持つものではない。ポセイドンの疑念がアテナについての、答えることのできない真相を明らかにしているので、アテナが回答を拒否したとは誰も読まない。実際、引用部以降のアテナの台詞からも分るように(69-73、後述参照)、「同情」というポセイドンの推定のキーワードは的はずれなものなのだ。

彼女の回答拒否(61)は、たんに話題が彼女にとって好ましくない、もっと自分が話題にしたいことがある、という意味での、話題継続拒否しか意味しない。ポセイドンの問いは、ironical という Denniston の評語に頼って言うと、揶揄に近い、冷やかし、ともいうべきニュアンスを持っている、と読むべきだ。また、ἐκεῖσε πρῶτ' ἄνελθε· (61)には、的はずれな揶揄に対する不快感の表明を読むべきだろう。

もっとも、揶揄や冷やかしが根深い(切迫した、というのとも違う)問い、あるいは疑念に根ざしていることもあり得る。そのことは、引用部分の後のやりとりが示している。ポセイドンは、「協力するのか」というアテナの問いかけに、あっさり「承知した」と答える。そして再び 59-60 の疑問文をかれに言わせた疑念に立ち戻ってしつこくアテナに尋ねる。ポセイドンの疑念の本来の形は「アテナの心変りの理由は何か」というものであることが明らかとなり(67-8)、ついにその問いに対してアテナから満足すべき答を得る。彼女の心変りの本当の理由は、トロイア人への同情ではなくて、アカイア人たちが彼女に対して行った無礼に対する怒りであったのだ。

ポセイドンの 59-60 の問いは、かれがアテナのふるまいに対した抱いた、抑え切

(15) interrogative な例として Denniston が E. から引用しているもののうち、*Med.* 1308 は先に指摘し、後でも論じるように、削除すべきだろうと本稿筆者は判断する。*Or.* 435 も極めて疑わしい例である。ここでは議論しないが恐らく οὔ που を読むべきところ。

れない好奇心あるいは不審感 —οὔ που 疑問文の底にある「恐れ」の感情と対比せよ— のひとつの発現形態であると言ってよい。そのような感情に基づく追求が切迫感に満ちた問いで開始される理由はない。好奇心を満足させるしつこい尋問あるいは追求が、軽い調子の質問から始まることがあることは、我々もよく知っているはずだ。

逆に、B では、写本にかかわらず、οὔ που を読むべきだと、本稿筆者は判断する。つまり、οὔ που を ἦ που で置き換える介入が本文伝承の過程で起きたと考えている。短い叫び声の類いが発せられており (οἴ 'γώ)、自分達の生活の根幹に関わることがらについて、合唱隊を構成する女性たちは疑念 ( 故郷を、そして自分を守るものを失うという恐怖 ) を抱いている。また、そういう深刻な問いであるからこそ、ヘカベも、知識がないから、諾否を明確には言えなくとも、少なくともまっすぐに答えてはいる。そういう意味では、写本にもかかわらず οὔ που を読むことに躊躇はない。

唯一躊躇があるとすれば、これが anapaest の中でやりとりされている発言の一部だとという事実にある。これまでに見た οὔ που 疑問文はいずれも iambic trimeter でのやりとりの中で使われているからだ。つまり、B で οὔ που を読むかどうかという問いは次のような問いと絡み合っている。1　οὔ που 疑問文は、colloquial / elevated というような文体上の水準でどこに位置するのか、2　anapaest という韻律がどの程度 elevated language と必然の糸で結ばれているのか、3　οὔ που 疑問文がどうして E. の iambic trimeter 内でしか、他では使われていないのか、というような問いである。

いずれも、安心して依拠することのできる解答を私たちの学問がすでに得てしまった、という種類の問題ではない。また、それを得ようとすれば、おおがかりな調査が必要になる問題である。もちろん、この小論が収容しきれる問題ではない。ここでは、さきほど触れた「躊躇」に関する限りで言いうることだけを言っておきたい。そして、もうひとつ、本稿が、ことがらの性質上、是非触れておかねばならない問題も、最後に論じておきたい。つまり、οὔ που / οὔ τί που に違いはあるのか、という問題である。

## 3

まず、οὔ που / οὔ τί που の違いということから明らかにしたい。以下、E. における οὔ τί που の全例をあげる：

(O) *HF* 965-7

Εξ.　Ὦ παῖ, τί πάσχεις; τίς ὁ τρόπος ξενώσεως
τῆσδ'; οὔ τί που φόνος σ' ἐβάκχευσεν νεκρῶν
οὓς ἄρτι καίνεις;

(P) *Ion* 1113-5

Χο.　οἴμοι, τί λέξεις; οὔ τί που λελήμμεθα
κρυφαῖον ἐς παῖδ' ἐκπορίζουσαι φόνον;
Θε.　ἔγνως·

(Q) *Or.* 1510-1

Ορ. οὔ τί που κραυγὴν ἔθηκας, Μενέλεῳ βοηδρομεῖν;

Φρ. σοὶ μὲν οὖν ἔγωγ' ἀμύνειν· ἀξιώτερος γὰρ εἶ.

(R) *Hel.* 94-6

Τε. Αἴας μ' ἀδελφὸς ὤλεσ' ἐν Τροίᾳ θανών.

Ελ. πῶς; οὔ τί που σῷ φασγάνῳ βίου στερείς;

Τε. οἰκεῖον αὐτὸν ὤλεσ' ἅλμ' ἐπὶ ξίφος.

(S) *Hel.* 475-6

Με. πότ'; οὔ τί που λελῄσμεθ' ἐξ ἄντρων λέχος;

Γρ. πρὶν τοὺς Ἀχαιούς, ὦ ξέν', ἐς Τροίαν μολεῖν.

(T) *Hel.* 541-2

Ελ. ἔα, τίς οὗτος; οὔ τί που κρυπτεύομαι
Πρωτέως ἀσέπτου παιδὸς ἐκ βουλευμάτων;

疑問文のニュアンスを表現する小辞として、少なくとも E. の中では、οὔ τί που と οὔ που に差違はなかった、という結論を出してもよいのではないだろうか。切迫した感情を表現する短い文を先行させたり、呼格や叫び声をともなっている (O, P, S, T)。そこに表現された疑念は、直接、疑問文の発言者自身の (P, Q, S, T)、あるいは発言者に極めて近しい人の (O) 安全や、利益や名誉に関わっている。R はそれらとは種類を異にする疑念を表明しているが、この疑念の核はどうやらヘレネの倫理観の根底にかかわっていることがらのようだ ( テウクロスがアイアスを殺したのか？兄弟殺しないしは主殺しがなされたのか？ )。K の例を参照してほしい。οὔ που によって導入される疑問文にも同じ種類のものはあったのだ。

回答についても見ておこう。O と T を除いて対話者は疑問文に対して直接回答している。O では対話の相手は狂ったヘラクレスであるから、当然言葉による反応はない。しかし、かれの狂った深刻な反応によって、疑問文が相手に回答を迫るだけの圧力を持っていたことを明らかにしている。疑問のやりとりが使者の報告の中に組み込まれているので、複雑に見えるが、疑問文がその対話者に回答を迫る圧力を持っていたことだけは、報告も明らかにしている(16)。T では、まだ対話者を得ていない登場人物 ( ヘレネ ) がひとりで、自分の安全の脅威となりうる人物を ( 実際はメネラオスである人物をテオクリュメノスであると誤解して ) 舞台の上に発見して、引用された疑問文を発している。彼女に生じた感情は言うまでもなく身の安全に対する恐怖である。それが深刻で切迫した疑念であることは、続く彼女の行動で明らかだ。545 までの彼女の発言は、彼女がその疑念に対して取った行動の自己描写で

(16) 伝令の報告の中に、引用部分はある。いわば劇中劇であるので、疑念をめぐる人間の心理的な関係は複雑になっている。伝令の立場から言えば、「まさか、息子は狂ったのではないか？」という父親の疑問を伝えた以上、その回答も伝えねばならない義務が伝令の中に生じたということになる。そういう圧力を οὔ που 疑問文は持っている、ということであろう。そして、演劇的に言えば、そういう疑問文を伝令が伝えた以上、その回答を聞かずにはいられない感情が、その報告を聞いている合唱隊のなかに生じたのだ、と言うべきだろう。もちろん、この回答を聞かずにはいられない感情は観客の間にも生じたに違いない。

ある。彼女は、瞬時にその疑念に対する回答を求めるべく行動を開始し、回答を見つけ出し、そしてその回答が示している危険から自分の安全を確保するための行動を取るのだ。L, M を参照のこと。つまり、οὔ τί που / οὔ που 疑問文では、仮にその切迫した疑問をぶつけ、回答を得るべき相手が舞台の上に存在しない場合でも、舞台の上の進行によって、その回答はすぐに求められるのだ。そのように E. は舞台を組み立てているのである。

さらにもう一点付け加えておきたい。*Med.* 1308 (例文 N) では、P. Harris 本文の伝える読み (οὔ που) の方を、中世写本が一致して伝える ἦ που を排して印字している。この選択が正しいものであるという根拠のひとつを、R や S との比較で得ることが出来るのではないかと本稿筆者は考えている。つまり、N で οὔ που を読めば、疑問文とそれへの回答からなる 3 組の対話 (N, R, S) は、対話としての構造を共有することになり、E. に固有な対話組み立て法として、その 3 例をひとつのものとして受け取ることを可能ならしめるのではないかと考えるのだ。

ある深刻な疑念を抱いた人物が、ごく短い、最初に頭に浮かんだ包括的な疑問文を発する (τί δ' ἔστιν; πῶς; ποῦ;)。この短い発言は、発言者の緊張の現れでもある (οὔ που 疑問文の特徴 c)。そして、その短い疑問文では表現として足りなかった部分、すなわち疑問の具体相、個別相を、短い疑問文に対するいわば説明として、質問者は付け加える。回答者は、質問者のそういった心理を深く理解しない者であるから (だから、同時に後半の οὔ που 疑問文の持つ回答を迫る圧力も理解しない)、最初の短い包括的な疑問に答える。そしてその回答によって、質問者は、自身の心理のより深いところに関わるそれぞれの 2 つ目の切迫した疑念への答をも得て、一応、質問と回答という組は完成する。このように関連させて理解するならば、E. の対話部構成法の一部についてある統一した、方法ないしは癖と呼ぶに値するものを、私たちは得ることができるのではないか[17]？

οὔ τί που と οὔ που の間には、ある一定の性格を持った疑問文を導入する、という機能の部分ではどんな差違もなく、唯一異なるのは、韻律上の価値である。そういう意味で、Stevens の「両者は metrical variant である」とする見解[18] を賛同とともに引いておきたい。長・長 (οὔ που) の方が、長・短・長 (οὔ τί που) より、この idiom を iambic trimeter 内で使う際に便利だということがまずあるだろう。なぜなら、この idiom は、疑問文の文頭に来るという性質からして、iambic trimeter の冒頭で使われることが極めて多いからである。その上で、恐らく τι と που がどち

(17) Kannicht (2. 55 n20) は、例 H との類似を理由に (もちろん最大の理由は P. Harris 38 本文が οὔ που を読んでいるということなのだが)、*Med.* 1308 で οὔ που を読むべきだとしている。つまり、τί δ' ἔστιν; という短い疑問文に οὔ που 疑問文が続くという両者の類似を根拠としている。似てはいるが、H では、従者の答がややあいまいであったが為に、さらにメネラオスの追求が続く点、ここであげた例とも *Med.* 1308 とも異なっている。類似は表面的かもしれない。ここで説明した問いと答の形式を E. が好むと理解した方がより正確であり、作劇技法的にも意味深いように思える。3 例ともに、具体的で深刻な問いの方に答が向かないのは、ひょっとしたら、οὔ που 疑問文を直接相手に向けないで、観客の方に向かって言ったからかもしれない。なお、この問いと答のズレという特徴は、Mastronarde 35-51 も議論している。議論の狙いは違っているが。

(18) Stevens 24

らも文副詞として働き、しかも意味においても「不定の程度」を表すという類似したものであるということから、一方の脱落を引き起こしたのではないだろうか[19]。

関連して、この idiom を (οὔ που について、疑問符つきで Kannicht[20]、双方について、Stevens[21]) 日常語的な表現であるとする評価について言葉を加えておきたい。日常語的な表現かどうかという判断を単純に下すことは、少なくともこれらの例については本稿筆者は避けたい。前5世紀末のアテネにおける日常語の使用に関して、私たちは十分な資料を持っているとはとうてい言えないからだ。Kannicht の疑問符もそういう意味だと思う。特殊な表現であったことは間違いない。だから、古代後期や中世の書写者による書き換えを誘発したのだ。日常語だというラベルを貼る言語学者たちの見解に全く根拠がないとは言えない。ただ、私たちが間違いなく言えることは、その実際の使用分布からして、そして、ここまでに明らかにした、回答を強く迫る表現上の機能を持つという性格からして、極めて対話的な idiom であったということ、ここまでではないだろうか。

日常語だというラベルが正しいかどうかよりはるかに重要だと思われることがあるので、そのことに簡単に触れておきたい。先に引いた Denniston は、οὔ που と οὔ τί που の解説の際、E. 悲劇の深い特質に関わるであろう事実を書き加えている。かれの解説によれば、アイスキュロスは、どちらの形も使っていない。ソフォクレスでは、後期の悲劇 (*Ph.*) で一回だけ οὔ τί που が使われている。E. では、本稿でこれまでに引いたものだけで、双方を合わせれば 20 例前後が使われている。現行の校訂本に依拠すれば、この数は確実に増える。かれは metrical variant さえ作り出した ( 少なくとも、他の作家が使わなかったのに、使った )。οὔ που あるいは οὔ τί που が使われやすいように E. の悲劇は出来ている、と言えるのではないか。あるいは、そういう言葉を口にすることの多い人物がかれの舞台には登場する、ということではないだろうか。例えば、アイスキュロスの『アガメムノン』で、クリュタイメストラがアガメムノンの背後に、連れて来られたカッサンドラを認める場面がある (950ff.)。この場面で、クリュタイメストラが「まさかあなたは私の正妻としての名誉を…？」というような疑問文を口にするというような場面を、アイスキュロスが創作の際に、採用すべき選択肢として、検討の対象にしたとは私には思えないのだ。いや、頭に浮かべたとさえ思えないのだ。かれの全作品が私たちのところに伝わっていたとしても、その類の、登場人物が自分の生命や名誉についてうろたえる場面が、あったとは思えない。οὔ που 疑問文が言語として日常的かあるいは高貴

(19) ここで引用例 M とその ap.cr. を見て欲しい。印刷している Diggle の採用している本文は、Dindorf の修正提案である。この提案は最近のすべての校訂者が採用している。もちろん、中世写本の伝える形は韻律上極めて異例の形をしていて何らかの外科的処置が必要であることは認めなければなるまい。そして、οὔ πού τι を残す外科的処置が提案されたこともないし、本稿筆者も思いつかない。しかし、οὔ πού τι という語順を間違いなく L が伝えていることは注目すべきことである。この形を残すことが出来れば、非常に大きな確率で、E. が iambic trimeter の影響下に οὔ που という idiom を作り出した、と言うことができるのではないかと思う。οὔ τί που という定順が、iambic trimeter の影響で形をくずした例が文字の跡に残されていることになるからだ。

(20) Kannicht 2. 54

(21) Stevens 24

か、という疑問よりこのほうがはるかに、少なくとも悲劇作者としてのE.（や、あるいはアイスキュロス）に肉迫するという意味では、重要であるように思える。

Anapaest律と、οὔ που の採用如何ということに関しては、今のところ上のような曲球を投げるしかない。ただ、さらにここでひとつ言えることがあるとすれば、Bで読みたい οὔ που はanapaestを構成してはいるが、同時に対話の一部でもあるということである。他に οὔ που あるいは οὔ τί που を確実に認めることが出来るのは、すべて対話か、仮想対話（すなわち自分との対話）である。悲劇におけるanapaest律はかなり広い概念であり、Bで見つかるanapaestは、その中でも、対話を構成する部分で使われている点を考えれば、最もiambic trimeterに近いところに位置するanapaest文であることは間違いないことであろう。

以上、まとめるならば、次のようになる。Aについては、Wecklein-Diggleにかかわらず、中世写本の読みを維持すべきであること。これについては、本稿筆者は、得られたデータからそうするべきだと確信している。Bについては、ひとつ懸念があるものの、本論が明かにした οὔ που のふるまいを勘案するならば、中世写本の伝える ἦ που という読みは、本来の οὔ που という読みが伝承の過程で置き換えられてしまった箇所であると判断するのがより正しい、と考えている。

## 文献表

（各項の最初の表示の形で本文や注では言及している）


Barett: W. S. Barrett, *Euripides, Hippolytos,* edited with introduction and commentary, Oxford 1964

Collard: C. Collard, *Euripides, Supplices,* 2vols, Groningen 1975

Denniston: J. D. Denniston (rev. by K. J. Dover), *The Greek Particles,* 2nd ed. Oxford 1954

Diggle, *OCT*: J. Diggle, *Euripidis Fabulae,* Oxford 1981 (ii), 1984 (i), 1994 (iii)

Diggle, *Studies*: J. Diggle, *Studies on the Text of Euripides,* Oxford 1981

Diggle, *Euripidea*: J. Diggle, *Euripidea,* Oxford 1994

Kannicht: R. Kannicht, *Euripides: Helena,* herausgegeben und erklärt, Bd.1-2, Heidelberg 1969

Mastronarde: D. J. Mastronarde, *Contact and Discontinuity: Some Conventions of Speech and Action on the Greek Tragic Stage,* Berkeley-Los Angels-London 1979

Page: D. Page, *Euripides, Medea* edited with introduction and commentary, Oxford 1952

Stevens: P. T. Stevens, *Colloquial Expressions in Euripides,* Wiesbaden 1976

Turyn: A. Turyn, *The Byzantine Manuscript Tradition of the Tragedies of Euripides,* Rome 1970

Wecklein: R. Prinz et N. Wecklein, *Euripides, Fabulae,* Leipzig 1878-1902

Wilamowitz: U. von Wilamowitz-Moellendorf, *Euripides, Herakles* Bd. 1-3, Berlin 1895

Zuntz: G. Zuntz, *An Inquiary into the Transmission of the Plays of Euripides,* Cambridge 1965

(北海道大学)